

トランスジェンダーを いきる

(最終回)

「自己物語の記述」による男性性エピソードの分析

牛若孝治

新たな男性性構築に向けて

1 始めに

身体の性別は女性・ジェンダーの性別は男性の筆者が、これから人生の折り返し地点を生きていく上で、自己の新たな男性性をどのように構築していくか。そこで本稿最終稿では、従来のジェンダー規範に基づいた男性性とは異質な次元の事柄を扱うことにする。

これまでの稿では、FTM トランスジェンダーの自己の思い込みや決め付けによって、男性性を補償してきた部分が数多い。その結果、誇張した男性性、肥大化した男性性などの性質を諸特徴とした通常の男性性とは相容れない巧妙な性質を持った特異な男性性を再生産してきた。現在、中年期に差しかかった自己のあり方として、このような諸特徴を持った巧妙さを含んだ特異な男性性を見直し、新たな男性性の構築を模索しなければならない時期にきている。それは、男らしさの遍歴を一心不乱に駆け抜けてきたこれまでとは異なり、中年期に向かう際に直面している男性性の矛盾や葛藤だけでなく、社会との共生を模索する必要性を痛感しているからである。

この社会との共生の必要性として最も重要なことは、同じ視覚障害のある人との共生である。本稿再就航では、どのようにして視覚障害のある人たちの世界に飛び込んでいったか、その結果、現在どのような男性性を構築しようとしているかについて記述する。

2 「視覚障害者の世界」に飛び込む

「あなたは視覚に障害があるのに、なぜわざわざ「視覚障害者の世界に飛び込む」なんて書き方をするのか」と突っ込まれそうな雰囲気だが、これまでの筆者の生き方としては、「視覚障害」より、性別違和、つまり「トランスジェンダー（性同一性障害）」の方が、圧倒的に生き辛さ・理解のされにくさを痛感したのは事実である。特に、視覚に障害のある人たちからは、「視覚に障害があるから、体の性別（女性）の素晴らしさが判らないのではないか」・「そんな話気持ち悪から止めてくれ、聞かない」などと一方的に拒否されてきたことが多い。鍼灸マッサージ師の資格

を有しているにも関わらず、そのようなことを平気で言っただけの視覚障害者が多いのは、筆者としては残念である。だから、筆者の立場としては、やはりここは、「視覚障害者の世界に飛び込む」と書いた方が、真実をついているような気がするのである。

① 同窓会で再開した友人からの一言

2015年1月、視覚障害関連の同窓会に出席した時のことである。当初筆者は、同窓会に出席することを躊躇した。視覚障害者の世界は狭い。だから、筆者のように体の性別（女性）に違和感を覚え、ジェンダーの性別（男性）として生きていくことを決意し、視覚障害者協会や盲学校の同窓会などの名簿の氏名・性別変更の依頼をしたところ、たちまちのうちにその噂が広まった経緯があったからだ。そこで筆者は当初、びくびくしながら同窓会に出席した。

乾杯の儀式が終わり、歓談しているときに、20数年ぶりに声を掛けてきた友人が一言、「おめでとう」と言ってくれた。「何がおめでたいん？」と聞いてみると、彼は筆者の耳元でそっと言った。「牛若君になったんやな。俺は嬉しかった」。筆者はよい意味で我が耳を疑った。男の友人がこんなことを言ってくれるとは思っていなかったからだ。再会を気に、彼は時々筆者の家に来てくれるようになり、その度にいろいろな話をした。「君はずっと前から男やと思っただで」と言ってくれた彼に、筆者は救われた思いであった。

彼との再会を期に、筆者はその後、盲学校の同窓会や、視覚障害者協会の行事などに少しずつ出席するようになった。その度に、「やっぱり、女性の方があなたらしい」などの無理解なことは言われるものの、理解されることもあることが分かってきた。「視覚障害者は情報が少ないから世界が狭い、よって筆者の性別違和の状況は理解されない」という筆者の思い込みが徐々に崩れつつあった。

② 「視覚障害者協会」への提言

彼との再会を期に、盲学校の同窓会や視覚障害者協会の行事などに出席することを通じて、筆者と視覚障害者仲間との間に少しずつ接点が見出せるようになった。その一方で、視覚障害者協会に決定的に欠けているものも見えてきた。それは、「視覚以外のさまざまな生き辛さに対する理解がほとんどないこと」である。視覚障害者協会であるから、視覚障害ゆえの困難や生き辛さについての社会への提言をするのは当然であるが、たとえば筆者のように身体の性別違和によって生じるさまざまな困難や生き辛さについては、ほとんど無理解である。たとえば、外出する際に目的地まで誘導してくれるガイドヘルパーの制度は、身体・戸籍上の同性が基本であるが、この制度を筆者が利用しようとする、女性として利用しなければならないことになり、このことは筆者の本意ではない。確かに個人として筆者の状況を理解されることは徐々に増えつつあるものの、視覚障害者協会として、筆者の状況を理解されることは、ほとんどないといわざるを得ない。そこで筆者は現在、視覚障害者協会に対して、視覚以外の他の障害や生き辛さについても目を向けるように提言している。

また、京都では毎年10月から11月にかけて、啓発活動として「白杖安全デー」が行われている。

る。これは、白杖を持っていることで、視覚障害者が何に困り、どのように改善して欲しいかを市民に呼びかけるイベントである。その際、いくつかの文言があるのだが、特に「白杖見たら声掛けて」という文言があり、これは視覚障害者協会が一番重要視している。しかし、筆者はこの文言を猛烈に批判している。「共生社会」が叫ばれている昨今、なぜ視覚障害者だけが一方的に「声を掛けられる存在」に甘んじなければならないのか、特に、単一の視覚障害者は、自分から声を掛けるスキルを身につけることが必要だ。筆者はこのことに対しても、視覚障害者協会に問題提起している。

③新たな男性性構築——「強靭さ」と「粘り強さ」

このようにして、視覚障害のある仲間や視覚障害者協会への提言・問題提起を重ねていくうちに、筆者の中で新たな男性性構築を模索する必要性を痛感するようになった。それは、「強靭さ」と「粘り強さ」である。「強靭さ」とは、たとえば視覚障害のある人たちから、「女性のあなたの方がいい」と言われた場合、「そういうことは一切言わないで下さい」と毅然とした態度で応酬する、視覚障害者協会への提言や問題提起をするときは、粘り強く論理的に、などである。一方「粘り強さ」とは、たとえば視覚障害者協会がこれまで培ってきた歴史をいったん受容し、とことん「入り込む姿勢」である。この場合、「いったん受容してとことん入り込む」というのは、何も盲目的に受容して入り込むのではない。いったん受容してとことん入り込むことで、今後改善すべき課題が見えてくる。その改善すべき課題を見出すためには、時間と労力が必要である。筆者はそのような意味で、粘り強さが必要と考える。

3 終わりに

2012年5月から連載してきた『トランスジェンダーを生きる』は最終回となるが、筆者のトランスジェンダーの人生はまだまだ続く。筆者は今後も、トランスジェンダーであることを肯定した上で、社会に発信していきたいと考えている。

最後に、この連載を読んでくださった方々に、心から感謝している。

うしわかこうじ（立命館大学大学院先端総合学術研究科）